

「飯舘村の母ちゃんたち」通信 No15

2021 年4月発行

第2作へのご支援をお願いいたします

岡戸 良子（映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会代表）

東日本大震災・東京電力福島第一原発事故から 10 年が経ちました。死者・行方不明者は 2 万 2000 人を超え、未だに避難者は 4 万人以上と報道されています。この様な状況下で、東京オリンピック開催に向けて、聖火ランナーが、福島県のサッカー施設「J ヴィレッジ」から被災地を「希望の光でつなぐ」と題してスタートしました。復興五輪という名の下で世界にもアピールしています。しかしこの 10 年、何も変わらない状況の中で生きていかなければならない福島の方たちに向き合うと、政府が声高に言う復興とは程遠い現実気が付きます。そしてこのコロナ禍と重なり更なる深刻な状況が浮上しています。

10 年の経過の中で、全村避難から帰村が始まっている村、また、反対にいまだに帰還困難区域のままの村など、福島の現状は、それぞれが複雑であり深刻です。飯舘村は、2017 年（平成 29 年）3 月に帰宅困難区域を除く村の大部分の避難指示が解除されました。行政は、多くの村民に帰村してもらえように住民福祉や生活環境の充実を図り整備を進めてきたようです。しかし現実はどうでしょうか？ 実際には、震災前の人口の 2 割程度しか帰村していません。そして残念ながら子育て世代の帰村者が少ないのが現状です。つまり一層飯舘村の住民の高齢化が目立ちます。2020 年からのコロナ禍と重なり、住人同士の

つながりが断ち切られ、高齢者の孤立、孤独は、更なる深刻な問題となっています。

1 作目の映画「飯舘村の母ちゃんたち 土とともに」は、震災からの約 4 年余りを、どんなに苦しい、つらい環境にあっても「笑ってねえどやってらんねえ」を合言葉のように飯舘村に生き抜く母ちゃんたちの生きざまを通して人間力と自然の恵みを描きました。

2 作目は震災からの 10 年となります。飯舘村の「までいライフ」は、今も存在しているのでしょうか？ 「までい」は飯舘村に伝わる、ゆっくり、ていねいに人と自然のつながりを大切にした生き方ですが、原発事故によりすべてが破壊されました。故郷を追われ、家族が離散せざるを得ない状況が生まれました。誰もが望んだ生活ではない避難生活を余儀なくされ、そこでも疎外感を感じて生きていかなければならない現実が福島です。この 10 年、様々な事情により人の心の移り変わりがある中で、果たして真の復興がそこにあるのでしょうか？ 復興という言葉を使うなら、それはひとり一人の故郷がよみがえり、心の復興と共に、それぞれの尊厳が守られていることではないかと思います。誰ひとり取り残されない社会になることを切に願います。

その願いを込め、映画の 2 作目の完成・上映に向けて、改めて皆様にご支援とご協力をお願い申し上げます。

福島第一原発事故から 10 年

古居みずえ (フォトジャーナリスト・映画監督)

パレスチナから福島へ

東日本大震災から 10 年経ちますが、まだ傷が癒えていない方もたくさんいらっしゃると思います。私は震災当初の 3 月、4 月、岩手、宮城の被災地をまわっていました。たくさんの瓦礫の山が続いていて、本当に中東の紛争地の爆撃された跡のような感じでした。あまりにも大きな出来事で、何をしていたのか？ 私自身、何ができるのか？ そういったことが分からなくて、悶々としていました。

そういう中、4 月に入り、福島県の飯館村で異常な放射線の数値を出したというニュースが入りました。その後、国が飯館村を計画的避難区域に指定し、さらに全村避難になりました。それを聞いたときに、長年追いかけているパレスチナ難民の人たちの姿と、飯館村の人たちの姿が私の中で重なったんです。そしてどうしても飯館村に行きたいと思いました。

飯館村の母ちゃんたちとの出会い

行ってみたら飯館村はすごくのどかで美しい村でした。でもそれとは裏腹に現実では牛飼いのお母さんが長年飼っていた牛たちを手放さなければならない、ミルクも出荷で

きない、移動させることもできない、牧草を与えてやることもできない、それで休業に追い込まれてしまう。そういった状況の時に、ちょうど遭遇しました。私はその人たちのことをこれからずっと追いかけていたいと思ったんです。それから数か月でその人たちは避難して、仮設住宅や、借り上げアパートに移って行きました。



左:菅野芳子さん 右:菅野榮子さん

その同じ仮設住宅で、2013 年に菅野榮子さん、菅野芳子さんと出会いました。初めて会った時から、榮子さんは朝から晩まで喋ってくれて、印象の強い方でした。私は自然体で話してくれるのがすごく嬉しくて、話の内容も、研究者でも、学校の先生でもないのに、榮子さんの言葉はすごく胸に響きました。彼女の言葉は経験とか、生活からにじみ出てくるものがあるんだなと思いました。隣にはいつも芳子さんがいて、榮子さんが無茶苦茶なことを言っても「うんうん」と笑って頷いている、そういう包容力のあるお母さんなので、私も好きで、2 人のコンビがすごくいいですね。掛け合い漫才みたい。だから私は 2 人に焦点を当てた映画が作りたいと思い、



「飯館村の母ちゃんたち 土とともに」を作りました。たくさんの方の応援を受けて、ご協力のもとにできたもので、本当に皆さんのお力でできたと思います。改めてお礼を言いたいと思います。

映画後の飯館村の現状

映画を撮り終えたのが 2015 年で、その頃飯館村は除染作業が進んでいました。ものすごいスピードで大きなトラックが行き来して土を運び、猛スピードで家屋の解体作業と除染作業が進んでいました。あとで考えてみると、2017 年 3 月の避難指示解除に間に合わせるためだったのだなと思います。



積み上げられた、除染物を詰めたフレコンバッグ

村民からは、そういう除染のやり方に対する不満、不信が聞こえてきました。山や森林は何も除染していないので、雨や風がその放射能を運んできます。だから平地をいくら除染しても再びまた汚染されてしまいます。

一般の人々の年間被ばく線量は、ICRP（国際放射線防護委員会）が勧告する 1 ミリシーベルトなのですが、除染が進んでいる間に、いつの間にか国が 20 ミリシーベルトに基準を引き上げました。いつからそうなったのか私はわかりませんが、そんなに変わっていいものか、基準自体が変わるということがすごくおかしいなと思いました。

2017 年 3 月、国は帰還困難区域を除く地域の避難指示を解除しました。避難指示が解除

されたと聞くと、問題がすべて解決されたかのように思われますが、現実はそうではありません。東電から出されていた原発補償金は翌年 3 月で打ち切れ、住宅提供も翌々年に打ち切られました。避難者にとっては一層厳しい生活が続くわけですが、特に避難区域でなかったところ、区域外避難者にとっては本当に大変だと私は思います。



避難指示解除の前後には、村では復興の名のもとに、いろいろな建物が出来ました。例えば「ふれ愛館」（上の写真）は交流センターで、大切なところだと思いますけど、すごくお金がかかっているなという感じがしました。2017 年 3 月末には「おかえりなさい式典」がありましたが、大半の村民の人は参加していなかったようです。

道の駅の綺麗な大きな建物が 2017 年 7 月に出来ました。建物だけでおよそ 14 億円、2 対のモニュメントが約 3000 万円かかっているそうです。桁の大きさにびっくりしました。



道の駅の内部

もっとびっくりするのが、学校です。子どもたちがいないと村ではないというような感じで、とにかく子どもたちに帰って来てほしいということで作られたと思いますが、小中学校一貫教育で学費は無料、送迎車もあり、至れり尽くせりです。校舎とスポーツ施設を合わせるとおよそ 65 億円というお金がかかっていてびっくりしました。

それだけのお金があるのなら、帰村者の中で一番多いお年寄りのために使ってほしいと思ってしまいます。人口約 6000 人だった飯館村には現在、約 1500 人が暮らしていますが、外からの移住者 180 人を除いた大半はお年寄りです。お年寄りが毎日不便なく暮らせること、それがすごく大切なことだと思いますが、それに必要なスーパーや病院などの設備がない。あるのは道の駅とコンビニだけ。病院もクリニックはありますが、週に 2 回午前中だけの診察です。最初の頃は薬も隣町に取りに行かなければならなかったのが、今は薬を送ってくれたり、ここでも出されたり、



外観はとても立派なクリニック

だいぶ良くなつてはきています。しかしなぜ、スーパーや病院など必要なことに使われないのかとても疑問に思います。

榮子さん、芳子さんの今

そういった状況の中、榮子さん、芳子さんは、いろいろ悩みに悩んで、放射能も気になりながらも、やはり先祖からの土地を離れることはできないということで、帰村を決心しました。

榮子さんが帰村に際して、もう一つ気にしていたのは、人と人のつながりでした。飯館村は原発事故前までは「まじないなスローライフ」をスローガンに、人間らしく生きることを目指していました。政府の原発を推進する経済政策とは対極的な村の政策だとも言えますが、原発事故で被害を被ってしまった。とても皮肉なことだと思います。

人と人のつながりが強く、今までは村が一つになっていたのが、6 年もの長い避難生活の中で人の心もばらばらになっていったということも聞きました。榮子さんたちはそれでも帰るんだと言っていました。それはつながる場がまだあるということでした。



榮子さんたちが住んでいるのは佐須地区ですが、その老人会と福島を支援している NPO ふくしま再生の会が協力して旧佐須小学校（前身の学校が明治 9 年開設）の中にお年寄りのために憩いの場を作っていました。



た。榮子さんたちが帰るところは仲間がいるからまだいいと言っていました。それまでも、廃校になった佐須小学校を地元の人たちは寄合所として、青年団の集まり、山津見神社のお祭り等何か行事の折、また打ち合わせや飲み会など事あるごとに使っていた思い出のあるところでした。そして帰村後は、お年寄りのために、足湯やスポーツや憩いの場として使われていました。

それが2019年12月に、壊されることになったのです。その理由は建物の老朽化と解体費用が無料のうちにということでした。お年寄りに残してほしいと願ったのですが、叶いませんでした。確かに老朽化や放射能の問題はあると思いますが、せめてお年寄りが元氣なうちは、残してあげられなかったのだろうかと思います。



旧佐須小学校の校舎の前に立つ芳子さん

榮子さんも芳子さんも解体後はふさぎ込む日々が続いていました。芳子さんはこの前身の学校を卒業しています。子どもさんたちもみんなこの学校の卒業生です。ここに絵や

いろいろな作品が残されているのを見せてくれました。芳子さんは「壊されるところは見たくねえ」と解体の日は家を離れていました。2020年1月、ついに旧校舎は壊されました。

一昨年(2019年)は、ふれあい茶屋やバンカリ小屋など、村民が作ったそばや民芸品などがおいてあった交流の場も相次いでとり壊されました。古い建物が壊され、新しい建物が並ぶ飯館村。それが復興かもしれませんが、人々の気持ちには割り切れないものが残りました。

その後、地区の公民館の近くに同じNPOの力でお年寄りが集まる場ができ、少しほっとしましたが、それでも長年の思い出は返ってこないと思います。

かつて自然豊かな村も、元の自然には戻らないし、放射線量が高いので山にも行けません。長い避難による住民の不在で住宅地や耕作地には、猿やイノシシが出没するようになり、人々が野菜を作っても動物たちに食い荒らされてしまいます。ほかにもハクビシン等今まで見たことのない動物もいます。村は電気柵を用意して、野生動物から守るようにしてくれたのですが、それでも猿は飛び越えてやってきます。中には勇敢なお母さんがいて、バケツを叩くぐらいでは餌をくれるかと寄ってくるので、花火を飛ばして追い払っています。

榮子さんたちも負けてはいられないと野菜や花を作るのをやめていません。裏の畑で



は野生動物にやられるので、自分の目の届くところを耕し、ナスやキュウリを作ったり、畑では寄付してくれたダリアなどの花を地元の人たちと一緒に育てています。満足はできませんが、以前の生活を少しでも取り戻そうとしています。

昨年からの新型コロナウイルスの影響で、あれだけお客さんの多かった榮子さんの家にも誰も行かなくなり、一人きりの時間が増えたそうです。特に緊急事態宣言の2か月間はさすがの榮子さんもウツの状態になったと言います。昨年6月にお邪魔した時はコロナも一時収まっていて、離れておしゃべりをしました。

原発事故から10年、傷跡は癒えることはないですし、先の見えない闘いが今も続いています。原発事故は人々の人生を変えたのです。福島県発表によると、帰村できない人が2021年3月現在およそ3万6千人、避難を続けているわけですが、以前と同じ、あるいはそれに近い生活に戻らない限り、問題は解決したとは言えないと思います。

「飯舘村の母ちゃんたち」第2作

私自身も、昨年の後半はどこへも行くことができませんでした。撮影させていただいている方に会うことも控えてきました。とてももどかしい1年でした。

現在は、2011年から撮り続けてきた人たちの10年を追う映画の制作に取り組んでいます。榮子さんたちの映画とはまた異なりますが、一回り若い酪農家のお母さんたちが、原発事故の現実と向き合い、悩み、苦しみ、冗談を言いながら自分の生きる場所をみつけていくというものです。

今度の映画の主役は原発事故当時、50～60代の人たちなので、まだ働く世代、現役世代



の人たちです。原発事故前は酪農家として精一杯働いてきました。皆さん、30～45年間、牛とともに働いてきた人たちです。それゆえに突然、原発事故で、牛との生活が奪われたときは、言いようのない喪失感、絶望感があったと思います。どん底から這い上がり、なんとか新しい生活を始めても、それでもなかなかうまくいかないことばかり。

酪農家だけあって、皆さん、そろって動物好きです。牛には一頭一頭名前がついています。お母さんたちは子牛が産まれたときからその子牛の母親になります。ミルクを飲ませ、育てていくのはお母さんたちの役割です。家族同然に育ててきた牛を原発事故後、放射性物質を浴びている可能性があるからという理由で屠畜に出さなければならなかった日は、お母さんの悲しみが爆発しました。事故後、悩み、苦しみ、現実と向き合いながら自分なりの道を見出していく、元酪農のお母さんたちの物語です。

「飯舘村の母ちゃんたち」第2作はまだ編集道半ばですが、第1作の「土とともに」同様、ご支援のほど、これからどうぞよろしくお願いいたします。

(去る3月11日に行われた、横浜YMCA主催のオンライン上映会での古居監督のトークを再構成しました。写真はすべて撮影・古居みずえ)。

横浜と伊丹 上映会参加者の感想 から

★前半で、芳子さんが、息子宅では世話にならない、「自立したい」と言ったこと、芳子さんが入院された時の栄子さんの狼狽、見舞いに行った時のお二人の涙に改めて心を打たれました。

そして福島、飯館の現状。本当に、福島のことを私ごととして捉える助けになる良質の映画でした。

★飯館村の方々の心情に寄り添って、その思いを映像にすること、とても根気のいるお仕事だと思いますが、これからの10年のために、本当に大切な記録になるのだと確信いた

しました。被災された方お一人おひとり、決して誰にも測ることのできない思いを抱えながら過ごされていることを、10年目を迎えた11日に気づかされました。

★東日本大震災は関西からは遠い世界の話のように思われますが、原発事故後の困難な状況でも明るさと笑顔を忘れず、一生懸命日々を大切に生きている姿に感銘を受けました。

★監督トークがあることで、映画に対する理解が深まり有難いです。その後を聞いて、余計辛くなりました。

★福島の人々の現実を知ることが出来、大変によかった。本当に、日常生活が放射能汚染によって奪われることは許しがたいことだと思った。

★原発事故で失ったものがあまりに大きすぎる。出演者の明るく、逞しく生きる姿に心を打たれた。

震災関連イベント報告 2021年3月

今年は東日本大震災から10年ということで各地で関連イベントが開かれました。ここでは古居監督が、招かれたイベントの報告をいたします。

■3月6日(土)

『揚げれ！希望の風』 共催 はんしん自立の家、宝塚ワイズメンズクラブ

兵庫県宝塚市のはんしん自立の家（障がい者施設）で、『揚げれ！希望の風』というイベントがありました。第一部は武庫川河原敷広場にて風あげ。第二部は「望郷の地 パレスチナと福島と」のテーマで古居が話をしました。この風揚げは中東のガザの子どもたちが毎年3.11になると、日本の東日本大震災を悼んで風あげをしてくれることに共鳴して始まったそうです。コロナ禍でもあり、お互いの触れ合いができないのは残念でしたが、風揚

げの様子は「はんしん自立の家」の入居者の皆さんには動画配信で見えて頂き、講演も含め会場にお越しになれない皆さんには ZOOM で参加されるなど機械を駆使して画期的なイベントでした。

■3月7日(日)

映画「飯館村の母ちゃんたち 土とともに」の上映会とトーク 主催：伊丹市立男女共同参画センター ここいろ

酒の醸造で有名な伊丹市。おしゃれな街並みにある伊丹市立男女共同参画センターここいろで、ミモザの日のイベントとして映画の



上映会とトークがありました。参加者の中には以前、この映画の上映会をしてくださった方も見えたり、地元の郷土史研究家の方も見えたり、皆さんとお話ができ良かったです。
(7ページ写真提供・伊丹市立男女共同参画センター)

■3月11日(木)

『東日本大震災から10年 3.11を忘れない…つながる』 主催 横浜YMCA

去年はコロナ禍のために、上映会だけでトークは中止となった横浜YMCAでのイベント。今年もまだコロナ禍でしたが、東日本大震災から10年で、オンラインZOOMによる上映会とトークが開かれ、72名の方々に参加して頂きました。一堂に会してもいいですが、このようなZOOMであらゆる地域から参加できるというのもいいなと思いました。

■3月14日(日)

凍み餅グループ(小海町)と味噌の里親グループと飯舘村の皆さんのZOOM会議

飯舘村の菅野哲さんや榮子さん、芳子さん、トシ子さんが中心に活動している凍み餅づくりと、味噌の里親の方々は通常、別々に活動していますが、ZOOMで初めての顔合わせがあり、皆さん、喜びでいっぱいでした。飯舘村の食文化を残していくという同じ思いの方々がオンラインとは言え一堂に会したことは画期的だと思いました。凍み餅グループの渡辺さんの進行で会が進められ、それぞれ皆さんが発言。榮子さんのお話では味噌の里親は後継者ができたということ、凍み餅はネット販売することができるようになったというニュースがありました。また次回こういう形で開きたいというお話でした。



ZOOM会議中の榮子さん、芳子さんたち

■3月20日(土)

子ども☆夢☆未来フェスティバル2021

主催：埼玉労働者福祉協議会

横浜YMCAのZOOM上映会+トークを受けて、急遽、企画して頂いたイベント。準備期間の関係で参加者は少なかったですが、トーク後の話し合いでは、浪江町や双葉町からの避難者の映画の感想やご自分のお話があり、とても有意義な会になりました。

★今後の上映会予定

9月19日(日) 鳥取市

「飯舘村の母ちゃんたち 土とともに」
上映会
上映開始 午前10時30分と午後2時の2回
会場 鳥取県立博物館講堂
鳥取市東町2-124 0857-26-8042
入場料 一般前売券 1000円(当日1300円)
小中高生前売券 500円(当日800円)
問合せ 鳥取コミュニティシネマ(清水)
TEL 080-8907-9293
メール masuo@jt4.so-net.ne.jp

通信発行：映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会

〒169-0072 東京都新宿区大久保3-10-1-834 Fax 03-3209-8336

メール iitate.motherprojects@gmail.com TEL 090-7408-5126